三重県総合文化センター情報誌
vol.109
4 5 6
イベントインフォメーション
2015年4月～6月
三重県総合文化センター
主催事業のお知らせ

©林景澤

三重のまなび2015「人生100年」安藤忠雄講演会

インタビュー

4月、三重県生涯学習センターでは新年度の幕開けを飾る「三重のまなび講演会2015」に世界的建築家、安藤忠雄さんをお招きし、私たちのこれからの生き方についてお話しいただきます。
講演を前に、建築家となるまでの歩みや社会活動への思い、そして今の日本の在り方についてお話を伺いました。

建築家への道

――安藤さんは子どもの頃、伊勢神宮に訪れたことがあると伺いました。まずはその時の印象をお聞かせください。

小学校の修学旅行で、伊勢神宮を訪れました。勿論建築など意識もしていなかった頃で、社殿の清廉な佇まいには、皆で感銘を覚えました。しかしそれ以上に心に残ったのが、五十鈴川の流れです。日常身近にしているものと同じ川なのに、まるで現実のものではないような、神秘的な奥行きを感じさせる。森閑とした森に囲まれた清らかな五十鈴川の流れに、「間」を大切にする日本の精神風土の原点を垣間見たような気がして、美しさに打たれたというより、何か、無意識のうちの感動のようなものを覚えました。

――建築家への道を志したきっかけはなんだったのでしょうか。

14歳、中学の二年生の時、非常に熱心な数学の先生と、一心不乱に私の自宅の改造に取り組む若い大工さんに出会いました。異なる職業についているこの二人の人物を知ったのをきっかけに、建築の世界に興味をもつようになりました。もちろん、その時点で「建築家」という職業をはっきり意識したわけではありませんが、数学を考えること、建物をつくること、この二つが一緒にできる建築というものの奥底にある魅力に、漠然と惹かれはじめたのです。

――その後、独学で建築家となられたわけですが、その時の苦労や、なぜ学び続けることが出来たのかお聞かせください。

家庭の経済的事情に加えて学力の問題があり、大学進学はあきらめざるを得なかった私は、働きながら、勉強しようと決心しました。しかし、まず何をどう勉強すれば良いのかが分からない。大学の建築学科に進んだ友人に頼み、授業で使う専門書を何冊も買って、その教科書をひたすら読みました。大学4年分を1年で読破しました。それが最良の方法だったのか、今でもわかりません。それでも意地と気力で1年間やり遂げました。

最もつらかったのは、同じ立場で語り合える友人も、導いてくれる先生もいないことでした。不安と孤独。何とか気を紛らわそうと、また本に熱中しました。そして1年間が過ぎ、今度は建築は勿論、デッサン、グラフィックデザイン、インテリアなど建築におよそ関係のありそうなことは手あたりしだいに通信教育で学びました。とにかく建築で食べていきたいという必死な思いがあったからこそ、続けることが出来たのだと思います。

人々の心と心をつなぎ、感動を刻み込むのが建築の真の価値

――20代の頃にはヨーロッパに渡り、様々な名建築を見てまわられたとのことですが、印象深かった作品はありましたか。

歴史的建築物で言えば、ギリシャのパルテノン、ローマのパンテオンです。当時の最高の技術でつくられた人類の尊い遺産であり、いずれも独自の魅力がある。特にパルテノンには均整のとれた比率の美しさがあり、パンテオンには天窓から落ちる光をはじめとした空間としての美しさがあります。しかし初めて訪れたときはよく理解できませんでした。知識が不足していたからです。その後数年おきに、何度か訪れ、自分なりに解釈を深めていきました。この二つの歴史的建築物を見てから、「集まりくる人々の心と心をつなぎ、感動を刻み込むのが建築の真の価値なのだ」と、強く認識するようになりました。

――安藤さんの建築作品といえばコンクリートを使った独創的な作品を思い浮かべる人が多いと思います。コンクリートという素材に特に注目してこられたのはなぜでしょうか。

コンクリートは、鉄やガラスとともに、20世紀を代表する素材です。これら普遍的な材料を用いながら、世界のどこでも見たことがない新しい空間を作りたいと思い続けています。素材を限定することで、建築の理念をより直接的に表現することが出来るのではないかと考えています。

建築をつくるということは、環境をつくること

――植樹活動や震災遺児への支援など、様々な社会活動にも力を入れていらっしゃいますが、こうした活動にはどのような思いで取り組まれているのでしょうか。

建築という仕事を通して、社会に何が出来るか、常に考えてきました。私にとって、建築をつくるということはすなわち、環境をつくることに他なりません。木を植えてまちを美しく元気にするのは建築家として最大の仕事だと考えています。また、社会の活力は子どもたちの元気にかかっています。阪神・淡路大震災や東日本大震災ではまず、親を失った子どもたちを支援すべきと考えました。彼らが悲しみを乗り越え、笑顔を取り戻し、そして学びを得て自立した大人になれば、この国の社会にとってきっと大きな力となる。そう信じて取り組んでいます。

ビジョンを持って生きる

――海外でもたくさんのプロジェクトを抱え、外国の人たちと接する機会も多いと思いますが、安藤さんから見て、今の日本や、日本の人々はどのように映るのでしょうか。

日本の社会は、今大変な局面を迎えていると思います。世界的に見ても日本の国の技術者は優秀でした。私自身、これまでヨーロッパ、アメリカ、アジアと、様々な国で建築の仕事をしてきて痛感したのは、日本の施工技術のレベルの高さです。とりわけ、品質・スケジュールの管理能力は図抜けています。緻密で繊細な国民性も影響していますが、これらを支えてきたのは、鍛錬を積んだ職人たちの高い技術なのです。

でもこの国は、画一的な教育システムの中で、勉強は出来るが没個性的で平均的な子どもたちばかりを育てています。私たちはそろそろ、教育も含めた社会の在り方自体を見直さなければ、台頭目覚ましいアジアの国々に取り残される一方です。

――最後に講演会に向けて、読者に一言お願いします。

グローバル化が進む社会の中で、私たちはこれから一層世界を見つめて生きていかなければなりません。明確なビジョンを持って生きることの重要性について、考えてみたいと思います。一人でも多くの方に、ご参加いただければと思います。

Tadao Ando

©林景澤

大阪生まれ。独学で建築を学び、1969年に安藤忠雄建築研究所を設立。代表作に「六甲の集合住宅」、「光の教会」、「FABRICA（ベネトンアートスクール）」、「ピューリッツァー美術館」、「地中美術館」、「表参道ヒルズ（同潤会青山アパート建替計画）、「プンタ・デラ・ドガーナ」などがある。2011年東日本大震災復興構想会議　議長代理、「桃・柿育英会　東日本大震災遺児育英資金」実行委員長。イェール、コロンビア、ハーバード大学の客員教授を歴任。1997年より東京大学教授、2013年より名誉教授を務める。

講演案内

三重のまなび2015 安藤忠雄講演会
「人生100年」
平成27年4月11日（土）
13:30～15:00（12:30開場）
三重県文化会館 中ホール
問三重県生涯学習センター 059-233-1151
http://www.center-mie.or.jp/manabi/

大変ご好評いただき、申込受付を終了いたしました。何卒ご了承ください。